

# 夏の記憶

86 茨城県立土浦第一高等学校 鉄道研究部

横川駅に降り立つと、そこには夏の香りが漂っていた。目の前に広がる雄大な山々も、夏の到来を静かに物語っているようだ。駅前で買う「峠の釜めし」の温もりは、昔と変わらない。

旧信越本線の廃線跡へ踏み出す。かつて黒い煙を吐きながら力強く急勾配に挑んだSLたちの記憶も、遠い彼方まで繋がっていた鉄路も、今では深い緑の木々に抱かれ、静かに眠り続けている。冷んやりとした幾つものトンネルを抜けると、目の前に圧倒的な存在感を放つめがね橋が現れた。

見上げるほど美しい四連の赤煉瓦。過酷な難所に挑み、命を懸けてこれを築き上げた明治の先人たちの熱量と、時の重みがひしひしと伝わってくる。

欄干から眼下の溪谷を見下ろすと、爽やかな夏の風が吹き抜けていった。釜めしの味わいととも、時代を超えて残る情熱がじんわりと胸に染み込んでいく。

この場所は今も変わらず、訪れる旅人の心を温かく包み込み続けている。



旅する人  
江戸川乱歩賞  
2026 出展作品